



阿彌 962 卷 2



児姓こしやう溜たまりよ来き阿あ蘇そ松しょうよわひて賀が儀ぎ成なり演あそる人ひとも多おほかり
 洗せんね小こ我わ威い成なり震ふるる荒あ尾お虎こ橋はし成なりはどり残のこ人の傍そば輩はい共ども
 此こもたためし又また壓おさ倒たして個この々く色いろ成なりういふひ萎な々くとして
 日ひ比ひ阿あ蘇そ松しょうと睦むつまじうらぬうへ今いまも偶ふと上かみ首うぶ尾び
 出で来き拜を賜たまへしふんぞいと誇をるあの面つら洗せんさして
 惡い沮じけもとたまりかねて旁わら輩はいよびくひ適あ間ま君きみ侯こうの御ご意い小こ
 香か爐ろ峯ほうの雪ゆきハハふと仰おほせしハは禪ぜん家けのをぬる問もん答たと云いふの
 ぬる阿あ蘇そ松しょうぬ誤あや心得こころえて簾すだ子た成なり捲ませらるる偶ふ中ちゆう
 といふものなりかふけもど君きみ侯こうもそと出で来きせしとして
 御ご恩おん賞しょうハ底そこ事ことぞかの清せい女にょが簾すだまされしハ雪ゆきよて詩しの意いも

阿彌 962 卷 2

かかへて。今日の御前ごぜんの花はななり。樂天らくてんが詩うたも香爐かうろ峯すずの花はな
 とはいとず。かゝる齟齬そごよてあせしハ。やとバ鹿相しかさうといふものし
 そまが物怪ものけの僥倖えんじんとぬ。不意ふい首尾しゆびせしハ。察さつをとるところ。方かた
 夫つまハ龍陽りゆうやうの肚裏はらあるちへ。胡論ころんは執成しやくじやうよりこと。這奴こいつハ悦えつ
 をせたるものからん。物ものどて佩刀はいとうハ下くださるくハ。一番鐘いちばんかね。一番登いちばんのぼり
 うのときふこそあつべけ。但外たづなはた不ふしめしもあること。さる
 奴やつ己おのれが分際ぶんげいとも弁べんまへど。御辞退ごじたいより寸法すんぽうもあつぬ。默呆もくたう。
 何なにハともめも。雪ゆきと花はなの區別くわつべつとへ。不ふ會得くわいとく文盲もんまうの不ふど。傍疼ぼうていし
 と。苦晒くせつハかせバ。餘あまの見姓けんじやうどもを執妬しやくたくかりふより。汝なんぢ相さう
 余唱朝よわいと謝あやまる小こど。阿蕪松あゐまつハいとくち羞はづらひ。不ふどし汗あせわ
 むる心地こころちしは。蝸牛こくわいの角つのめだちて。こが上うへよりおろり天てんはいと

まき主君まきみハあしとよ小罵のらせてハ。あら勿体もつたいかしと。はつしこと
 とくそい。今いま虎橋こはしぬし。の御寸ごすんどころ一いつと知していまどその二ふた
 奴やつ志しらぬとつものなり。如何いかんふとかまバ。おほよそ風流ふうりゆうの道みちハ
 詩うたも歌うたも雪ゆきハ花はなと比ひらへ。花はなハ雪ゆき小ことくましてこそ幽ゆう
 玄げんなる風韻ふういんとも承うけたまハははま。一いつくその例れいハ引ひいていくんハ。其その
 數かずかどていあるべからず。たゞその最膾炙さいがいし人口くちぐちぬるものハ。華はな
 てヤさん唐詩たうしは去歲きょざい薊南梅げいなんばい似に雪ゆき今年けんねん薊北雪げいぺつせつ如ごと梅ばい櫻おう
 ちる木きの下風かぜハ寒さむからでそらにまらむぬ雪ゆきをふりける。雪ゆきハ
 ゆた。とぬ花はなとい。あまりぬる俚言俗趣りげんぞくしゆよて。いづくふおもま
 ろも味あじハひの侍さむらいるや。いふおやいふおと。こちふたのふおと。じ
 し小硬こがた猾わうき虎橋こはしるまども。一句いちくの下くだおひこりらま。たち

菊池家の
 側室雲居の
 方香火院
 水禪寺の法
 會よりして
 たすことの侍
 女もて雲白
 の衣裳と襲
 させたまふ



まち收と消て。頓口無言おぼえど報しその面。猿の尻
ふとしふらう。自来ふの房裏。おくまりたる所をかばかく
論口ふおふといへども。別室よのしのおまを死せてふまごり
き。短氣烈火火のごと死荒尾虎橋ふのとき怒心頭うり起て
憤得て。毒火沸かえまべ。いっふもふて這奴が過失が見え
らば。又候喧嘩が仕つけまたくかよお擲此の氣が出さ
と。多方計較は。彷徨とてありけるが。偶と阿蘇松が佩
刀の置所法よしづまてさし出たるが見えり。最究竟ごさん
ふま。那邊が死とぐるふらまて阿蘇松が佩刀がわしに
まうせて蹴ちらせ。佩刀はそのすく瓦落々と轉さたるを
餘の兇姓ま手して刎殺せば。壁は礎で割刺と音す。人々

手たきて関ところへ。阿蘇松慌ふまを把てたいた。死
尚こも恩賜の佩刀がせせば。おのまやとく活たくべきと肚
裏よ悲おしへども。態と面が和らげ。縮めてぞ居たり。虎
橋は案よ相違し。いりよ柔弱者ふもせよ。佩刀が蹴らまてふ
も黙止ていあるま。その咎りひくるが待て。刀の置やり式
小遊をしともて。尾鱗がはけて罵志辱しめ。あはよくバ
眼よ物とせんぞと。巧もねもひしそのかひなく。今かくたさ
うりまごきたる拳動。原来這奴生を付たる臆病漢よし。ぞ
つらんその内兜が見えり。やとら居丈高ふま。阿蘇
松が屹と睨まへ。おのまはいひ甲斐なき。蠢東西かま。この
壯夫たりせば。武士の精神とつねなる佩刀が蹴らまて。半晌も

猶豫をべきや。我今かく無礼なふせども。起りて敵對せぬ。去の虎橋が怖志ひう。何ふもせよ。おれ不辨菽麥の委壁ふまると。飽まで嘔きとづかひとといへども。阿蘇松ハ聾のごとく。あつらふんと蹲まり居て。いさかしくあつらふね。虎橋まると。欺負。おのまの腐儒者。孩兒世喬の洒家。向て。いりて相闘なえせん。おの生白けたる志や。面ハと。罵もあへず。扇子逆手ふらりて。阿蘇松が腮ふわて。仰ひけ。晡と唾な吐らけ。一ハ言語道斷の狼藉かとも。官城阿蘇松ハ天の縦せる寛厚の性かま。ま。くこそ一生懸命の期か。も。倘御供前。堪。聞。が。私闘。身。果。果。上。耻。の。こ。さん。鬼。よ。かく。堪。忍。る。ふ。志。く。ざ。と。胸。の。忿。懣。な。い。鎮。の。お。い。志。づ。め。虎。橋。

ぬ。い。ふ。い。あ。や。り。ふ。る。雜。言。う。か。無。礼。戯。も。場。所。ふ。ら。る。べ。し。這。里。ハ。御。供。と。さ。小。侍。と。ち。と。ハ。御。遠。慮。あ。る。べ。し。と。側。首。背。向。鼻。紙。と。う。て。唾。な。ぬ。く。へ。ろ。ハ。い。と。老。趣。き。舉。動。な。り。虎。橋。ハ。呆。ま。う。つ。り。げ。よ。一。向。の。烏。龜。め。己。が。悻。怯。な。掩。は。ん。と。て。車。は。虚。托。志。う。ら。め。と。い。い。見。く。び。り。や。と。ま。阿。蘇。松。御。供。と。死。ハ。和。主。ま。か。ら。づ。う。か。る。殿。堂。よ。て。お。も。を。な。ど。ま。で。よ。耻。辱。な。う。け。は。ち。も。朽。と。し。と。も。お。も。ハ。ず。と。が。無。礼。な。得。咎。り。ぬ。ハ。沙。汰。の。か。ご。り。の。鄙。妻。女。の。腐。は。さ。る。も。劣。ま。り。そ。ま。ふ。か。ん。ぞ。や。日。比。汝。が。父。廉。助。が。嘴。く。は。聞。く。小。几。武。士。こ。ろ。も。の。平。生。ハ。文。道。よ。て。身。な。脩。む。ま。ど。も。ま。さ。う。て。あ。て。こ。の。君。の。馬。前。よ。て。大。敵。な。う。ち。擡。き。粉。骨。な。は。く。さん。ハ。武。

藝こそ肝要かまとはねよ刀法鎗術の用心を訓と
 よし聞と見とい裏表今この弱息が臆病な見もば
 廉助とて高の志をた木葉武者驚破敵ととる時
 瓦多くくと戦出し。たちまち見崩して一番に逃走
 治定なり。武士の風上よもあつたゆ族よて。禄賊ともい
 べいと。出放題なる悪口雜言このと死にいたり。阿蘇松
 所謂堪忍囊の緒なきらり。不どしたやうあへて。ね
 ぼえど髪毛天さま小堅敦圍わいて。適間より御坐ちりれと
 憚用捨ておけばはきあがり。方量しふき無礼の段々武士の
 魂は土足ふけ。刺さへ人の面を巻と。思多も君がさし
 父は種々の悪名にけいで。人面獣心の國賊らと思ふ

さま罵りへ。もとや聞てて。一分たす。弓矢八幡由るを
 ましい尋常は勝負せよと。飛志とつて身がまえせーがや
 よ待虎橋汝と。今這里よて討果さば。大切の御法會といひ
 消浄の道場は血が落さん。思をあま互に死ても不忠の遺
 恨いつを明日壺井の松林よて。潔く勝負なま。本事の
 ほどな見をべいと語はる。虎橋呵々とうちこらひ。放屁
 阿蘇松ふんぢこの場なひ脱て。今宵のうちに小逐電せんさ
 肚裏その手は喰ぬぞ。逃バとて小がさう。真の武士の味の味一本
 かくけて塩梅よと。佩刀をろりと。稜をか。おどろあがつて阿
 蘇松が真甲がけ。売竹割と切はけり。明晃々志とる刀の
 ひろ。巴は咄嗟と見えたる。當下阿蘇松飛鳥のごとく虚

閃一闪とかい。扇子がもつて丁ど打。佩刀のからりとねち
 たまけ。並居見姓等こまね看て大半虎橋と荷擔とは。
 阿蘇松竹中にとり圍芽ごねの鋸脱はきて。八方より討て
 かる。阿蘇松竹とす。落たる刀把手も見せず。虎橋が短刀
 小てうちびふね斜ひよとひちがへて。那の剛敵の虎橋とやと
 一声。大袈裟は劈斃せば。鮮血熱と洒まて。紅梅伴の紅梅の
 花がちらせざるごとくあす。その騷動おほうたぬらず。瞬くうち
 小人影馳あはせり。矢庭は阿蘇松竹ひきをへ。血刀もたたり。
 屏風もて。圍嚴重は警固なまし。まう。一頭は乱駈ぐる
 兎性ともな欄住。ことごとく手囚ふま。つ。菊池殿のよし
 聞し召おほき小驚うせたまひ。そのま。阿蘇松竹甚察役の

者よわげけら。縁故は委細問糺さしゆたす。頭殿よ
 いかる不意の椿事いできて。饗膳いまた央ふらざる小掃
 興したまへ。忙しく供觸はたへい。そを寺門に互出ら
 せ。歸駕を促がし。送ひける

○三回 鶺鴒

名たるる月の。痴雲のためよひうそね失ひ。色ゆく花の。
 狂風よ香ねひるしうす。美玉碎けやとく。甘泉竭
 やを。とるほご小勘察吏の人々ハ荒尾虎橋宮城阿
 蘇松竹傷の一作。逐一は査糺なとげ。一千人の口單と
 去たれめさせて。執政吉弘市正よと。出。ぬは詳よ
 事の容子が申て。その發落をぞあいまちける。吉弘市

正ただまきは聞きて頃ころ又また裁斷さいだんともふううね。勢せい左思右想さしうしうしゆも。
 初はつ虎橋こはしよりより志しりけたる喧嘩けんかも。ふと小種こね々の雜言ざげんと
 吐はき。刺ささへ上の事ことまでまでようせい一条いじょう。國老くわくろうの嫡ちやく々々の
 似にけかき不敬ふけいさきど今いまその人死ひとしせい上うへの別べつ罪つみ
 問とべきよしももし。まま阿蘇松あそまつハ最止事さいしじ得えず
 去さて討果うちぐわせいけぬままば。その罪つみ軽かろき小似こにたままども。
 同僚どうりょうハ殺害せつがいせいふと明白めいぱくふふ志しり故こ死し式目しきめ小據せうじょ
 て。喧嘩けんか両成敗りやうせいばいとと。阿蘇松あそまつとバ武法ぶぽう小こままううせて自盡じじゆ
 ふふささ志しりんりんふふののああららバ公こう正せいふる制度せいどふふららんん志しりなり
 志しりなりと計けい軟なんししりて。誥朝ごてう御館ごたにハ出仕しゅっしななままし。
 君侯きんこう又見またみえて言こと上あるるやううの。昨きのう十八日じゅうはちにち御香ごかう火院かえんの御法ごぽう

進しんまたいて荒尾あらい虎橋こはし宮城みやぎ阿蘇松あそまつハ傷やぶの儀ぎ精細しやうさい
 明めいけりりまつまつるる律例りつれいハ查侍しやうじべるる。如此かくの定法ていぽうと一般いぱんの
 得えへ。虎橋こはしハ屍しかばねハその父ちち彌平やへい左衛門ざゑもん下くだささるる葬式そうしきと兎う
 又阿蘇松あそまつ儀ぎハ古例これいののおおとと。賜たまひひおおせせけけけけららままふふ
 かるるべくくいいハハんんりりと伺うかがひひりり。菊池きくち左馬頭さまのあたま殿どのハハままとと聞き
 せせららもも忽たち地御氣色ぢごきしきかりり。御顔ごかほ色いろ真青まろハ筋すぢくくままたらら
 て。御眸ごまゆハハ鋭えい又見またみええさせせたままひひ。市正いちせいハハままごごいいみみ果みごご
 るるよよつつとと起たちちてて奥おくふふりりくく駈かけけ入いりり。市正いちせいハハのの御光景ごこうけいハ
 見みるるよりより果みまでまで半晌はんじやう口くちハハ開ひらくく。ここもも全ぜんくく君侯きんこうの
 御心ごこころハハ阿蘇松あそまつハ助たすけけたくたく思召おもひよゆゆええなりりと猜あやみみるる
 由よしハハ自來じらい忠直ちゆうちやくの人ひとおおままハハ日ひがが裁判さいはんの未熟みじやくなるることことを

池上の花と
 賞して菊也
 の雪はいえと
 吟ひなまし
 羣臣その意
 解せず阿
 孫おひと
 こと悟り
 事止として
 蕭子竹捲
 きひ



知^しる且^{かつ}ち且^{かつ}おそま、そのま^ま御^ご殿^{てん}なま^まり人^{ひと}出^で私^し衛^ゑ
 小^こ田^たもてもろどく寝^ね食^じなやとんせず、多^た方^{かた}あ^あんじ
 づらひ^{づらひ}ろ^ろぐいづま君^{きみ}侯^{こう}の御^ご内^{ない}意^いな^なうか^かが^がひ見^みんと^と教^た回^{くわい}
 出^で仕^しな^なぬせども、そ^そま^まに^にけ^ける^る幹^{かん}辨^{べん}どもい^いつも^も御^ご不^ふ例^{れい}と^と
 このま^まい^いひつ^つごと^と御^ご逢^あある^ること^とふ^ふし、ふ^ふま^まふ^ふより^りて^て掾^{てん}吏^しの
 もの^{もの}ぬ^ぬして^て夥^{おほ}の^の帳^{ちやう}簿^ぼな^な閱^えせ、その^{その}例^{れい}や^やある^ると^と只^{ただ}願^{ねん}の
 穿^{せん}鑿^{さく}と^とま^まとも、別^{べつ}よ^よと^とせる^る異^い議^ぎも^もふ^ふけ^けま^まば、市^{いち}正^{せい}ま
 とく^{とく}叫^{こゝろ}苦^く、眉^{まゆ}頭^{かみ}卧^ふ登^{のぼ}な^な起^たて^て来^き、と^とま^まか^かう^うさ^さ内
 肝^{かん}膽^{たん}な^な惱^{なご}ま^まし、齒^はな^なさ^さへ^へいた^たむ^むる^るど^どり^りぬ^ぬる^るよ^よま^まの^の夜^よ
 一^い夜^よた^たも^もひ^ひ躊^{ちゆう}躇^{ちゆう}て^てあ^あも^もぬ^ぬら^らま^ます、獨^{ひとり}燭^{しやく}な^な繁^{はげ}し^し且^{かつ}な
 待^{まち}ろ^ろぐ、猛^{もう}然^{ぜん}手^て段^{だん}な^なあ^あも^もひ^ひほ^ほきた^たま^ます、ま^まの^の手^て段^{だん}と^とい^い御^ご

側^{わき}室^{むろ}雲^{うん}居^いの方^{かた}の^の世^よは^は勝^{かち}ま^またる^る怜^{あは}れ^れの^の性^{さが}な^なる^るな^な聞^き知^ちり
 居^いよ^よど、ふ^ふま^まよ^よ便^たり^りて^て私^し下^かより^り君^{きみ}の^の所^{ところ}思^{おも}ひ^ひ規^きひ^ひ聞^きや^やと
 い^いそ^そり^りに^に廣^{ひろ}敷^{しき}小^こ手^て曼^{まん}な^な索^{さく}り^りて、その^{その}ま^まと^とぬ^ぬい^いひ^ひあ^あま^まり
 啼^な、頼^{たの}み^みけ^けま^まば、御^ご側^{わき}室^{むろ}も^も快^{こゝろ}く^くう^うけ^けひ^ひきた^たま^まひ^ひける、
 此^{こゝろ}の^のゆ^ゆべ^べ菊^{きく}池^{いけ}殿^{てん}蘭^{らん}房^{ぼう}へ^へ入^いら^らせ^せた^たま^ます、雲^{うん}居^いの方^{かた}百^{ひゃく}般^{ぱん}
 心^{こゝろ}な^な費^ひや^やして^て豫^よづ^づり^り設^まな^なう^うま^まし、美^ひ酒^{しゆ}佳^か有^うハ^ハさ^さら^らる^る、
 吹^ふ彈^{たん}の^の興^{きよう}な^なと^と催^{もよほ}せ^せた^たま^まひ、御^ご機^き嫌^{きら}う^うる^るハ^ハく^く見^みえ
 と^とま^また^たま^まし、御^ご話^わの^の蔓^{つる}よ^よほ^ほきて、過^{あや}し^しみ^みる^る見^み姓^{せい}供^{こう}
 の^の事^{こと}あ^あま^まし、對^あ手^て阿^あ蕪^わ松^{しょう}い^いう^うか^かる^る御^ご所^{ところ}置^おき^きより^り行^いか
 せ^せた^たま^まし、何^{なん}氣^きか^から^ら問^と見^みた^たま^まし、頭^{あたま}殿^{てん}き^きま^まし、
 と^とま^ま、と^とれ^れバ、い^いま^まど^ど何^{なん}と^とも^も家^か老^{らう}ど^ども^もより^り申^ま出^でと^とは^はり

仰せてまゝ餘の御話も轉て止む。そをうり君成らせ
 たまふぶとふ。雲居の方。とりふまてまのこゝに現げい
 たまへ。いつもたふ。御應なりた。一夕雲居の御方君に
 向てせたまひて。妾ふとれもひ出せ。おとのこへる。妾が
 御貫の知りすぶとく豊後の府内にて侍るが。妾いまも
 いとけぬきとれの奉よて。國司大友右近將監さまへ近習
 父勤り。高階源藏とつものこゝらひ。恰ど此度の
 おとく互よ意氣地の論口より。六の源藏當坐よ一人と斫
 殺し三人の傷はけ。巡檢の吏役拘到て。縁故を猜く
 糾明せ。源藏もとより二ねき忠直のしむて。私なく
 奉仕ける由。那の邪人ども。君の御前より。いと妬み。下

城の途よ待ふせ。不意討小せんとして。反て渠がためよ討
 をし。とつふこと。證據分明なるふより。國司の御裁判よ。那
 源藏小百兩の首價に。出させ。おまは。吊ひ料として。死
 者の妻子小くごさ。残の者ども。御叱よて。結案侍り
 ぬ。とけむらふものかたらひ。たまへ。菊池殿聽了てのこ
 ナ。ハ。バ。呼。その判断。いまだ。宜きよ。慥さよ。とい。云。べ。う。らす。
 喧嘩。両成敗。とつふ。あ。し。ハ。古。より。の。式。法。よ。あ。し。ど。や。雲。居。の
 が。膝。に。お。と。め。さ。れ。て。その。源。藏。へ。ハ。切。腹。お。や。せ。は。け。ら。る
 る。殿。御。頭。に。綽。せ。たま。ひ。否。く。卿。の。ま。う。さ。ろ。く。通。な。ま。は。
 その。源。藏。と。や。ら。ん。誠。忠。無。二。の。者。ふ。る。べ。し。さ。ま。バ。その。忠
 臣。に。欺。殺。よ。せん。と。せ。し。惡。黨。等。と。一。般。よ。裁。許。ま。べ。主人

事^{こと}に聞^きしと世^よに誚^しらま^ま臣^{しん}たるものまを以^もて見^みて。以^もて未^ま
 忠^{ちゆう}義^ぎを勵^むむのあらど。雲^{うん}居^くの方^{かた}い^いくあやま^ま。さあまは
 源^{げん}藏^{ざう}の御^{おん}助^{すけ}ふさふが御^ご政^{せい}道^{だう}まかひとべるふや。殿^{との}
 仰^{おん}すらく。あらずはどめよしつごとく。助^{たす}けてハ國^{こく}法^{ぽう}
 たらがたし。予^よづたりふ旨^{しめ}ハ。その源^{げん}藏^{ざう}とやらんが勘^{かん}當^{たう}
 まで。領^{りやう}内^{ない}がたまひ。追^お放^{はな}せしめ。死^し者^{しや}ハ名^な跡^{せき}とたてつり
 へし。荷^{かり}擔^{たん}の者^{もの}等^らハ急^{きゆう}度^ど叱^ちり。過^{あやま}て改^かじ^じべき利^り解^{かい}と加^か
 をませふん。かくせハ大^{おほ}概^{がい}寬^{かん}仁^{にん}の制^{せい}度^どたるべし。雲^{うん}居^くの
 方^{かた}この御^{おん}旨^{しめ}を聞^きて暗^{くら}々^{ささ}地^ぢよりあひ。またし四^よ表^{へう}八^{はち}表^{へう}の
 御^{おん}かたらいふ。おぼえて。その夜^よハこきて帳^{ちやう}内^{ない}もまじりやり。おろ
 しとぞ。吉^{きち}弘^{こう}市^し正^{せい}ハ雲^{うん}居^くの方^{かた}より御^ご内^{ない}意^いを以^もてたへ聞^き

へらうとてかきまふし。かくて市^{いち}正^{せい}ハ誥^ご且^{かつ}御^ご館^{たう}に出^し仕^し
 ぬふし。執^{しやく}謁^{てつ}の願^{ねん}けをば。いち早^{はや}く御^ご召^{めい}出^しし。あうら。市^{いち}正^{せい}
 ハ御^{ごん}側^せ室^{しつ}の内^{ない}意^いを以^もて。官^{くわん}城^{じやう}阿^あ蕪^わ松^{そう}追^お放^{はな}のことと窺^{うかが}ひ
 たてまはま。菊^{きく}池^ち殿^{でん}たやとく御^ご聞^きどまあらせらま。まじ
 くらへとの御^{ごん}誼^ぎおぼ。市^{いち}正^{せい}ハさしもの疑^ぎ獄^{ごく}の頓^{とん}に結^{むす}案^{あん}ま。お
 ぼし。ひとへ小^{せう}雲^{うん}居^くの方^{かた}の御^{ごん}庇^{へい}おぼ。まじ。かたどけおぼく
 ねもひ。且^{かつ}その幾^{いく}明^{めい}を感^{かん}どけける。その後^{のち}菊^{きく}池^ち殿^{でん}斐^{はい}
 翠^{すい}帳^{ちやう}へ入^いらせらま。御^ご機^き嫌^{けん}よく。やよ雲^{うん}居^くの方^{かた}の阿^あ蕪^わ松^{そう}
 とい。長^{なが}の暇^{ひま}を以^もて。追^お放^{はな}せしと。前^{まへ}日^{にち}卿^{けい}の虚^こ談^{だん}く
 出来^こた。まじ。仰^{おん}せらま。けるとぞ。さてこの菊^{きく}池^ち殿^{でん}いふ。

源藏公傳 卷之一

ハカクまで阿蘇松が助けたくればせしと。其奥意をく
ハハく原ぬまバ、みまより先菊池殿水禪寺の智遠慧
長老がまねらせらま。密にままに内意がおほせらま。近
臣どもの相が看せしめたまふ。長老一を看りていへらく
個とし骨法凡庸ふとべし。そまが中よ。宮城阿蘇松の
希代の神相よて。その前途たのもしくふしひへる。渠へ
王佐の才が具したる人傑よて。後末世が濟ひ國が利し
天下の至寶とぬるべきものなり。ままごとく惜べし一個の
欠穴ありて。十四五歳の際不意災星よあひて。かたし
一命も保ちかたうらん。倘天幸を得て。よの大難がま
免うまたらま。ハハ。渠が功名成就とべきふと密に

嗟嘆がせらまける。菊池殿仰すやうさあらハ如何小
志て助てま。長老拂子とりぬほし。天機洩とべらさ
しを應らまける。菊池殿このとき長老の筆語が記
得居たまひて。年頃試見たまふ。近臣等が身の上の吉
凶。此由違はずして。符節があはをるがぶとくぬり。旧より
あうあるべきとづり。那の慧長老といへる。震且國揚子江
ふる金山寺よて修煉せらま。高僧よて。風鑑ふとま
た比ぬく人の禍福が指すま。淵鑑がぶとくぬん
まふよりて。菊池殿ハ。あの田も阿蘇松が事起し
とき。渠が齡丁と十五歳ふる由へ。長老の風鑑。その驗
あること。神のごくぬるが感服したまひ。世の利益の為

阿蘇松の事
巻之二

阿蘇松の事
巻之二

〇世三

おぼしりし幸志て助けとらせたまひしハ依估ぬき
ごころ明白よて私よその徳果に貪たまぬ證據ハ御
膝下よ召使くまらず。自國の利益のたけふ志たまはら
ふてしかる知るべし久後ふいたる。あつ阿蘇松駒澤某
と喚を非常の功蹟にたてその名に海内よ震ひし時
菊池殿くどもて市正ふかくと明させたまひしごぞと
の夜雲居の方へおほせらまし御話といひ類なき賢明の
君ふまらし。そと虎豹の兇いまだ文にふさずといへ共
しや牛に食の氣勢あり。さるふど小勘察衙門よ囚こ
めかゝまたる。宮城阿蘇松ハ志かく人殺せしうへ露
ばうも命のむいらんとたり。未練の心いふけをもども大

罪に犯せし身の私よ死路に求むるハ上への恐怖に
まもわらず。しや公裁にまらちて。嚴科小處せらるべしと
とくより髻にむらとせ。最後の觀念潔くぞ見え小ける
浩所よ上使入来て。君の嚴命に演進放仰にけらる
旨いひこせハ。たぢ小護送の健卒ども。無刃の阿蘇松と
いつたて出づ。阿蘇松よゆねもひもぐけず。からき露余と助
かてーがむや除名の身のうち萎まはく。まの衙門とそたち
出ける。いづろねき行路の人もあつ光景に見て總て哀を催せり
かくて阿蘇松ハ行こと十丁あまりふして。官橋の上より。廻小
御館の覺に望んで拜にふし。君の大恩に謝したてまつり。
正しく再生の父母なりと。感激涙堰めへず。まの期ふふび

荒尾虎橋
 同僚官城
 阿蘇松が
 麗遇あつ
 死をねた
 無礼とほ
 多分無口
 吐て罵辱
 り遂に天
 椿事と着
 出す



まつり
 の
 宗
 祀
 あり
 と
 なる



阿蘇松が
 麗遇あつ
 死をねた

ても嫡親嫡母なご一目だも遇まももへど。こても遂こぬ
時機おまば。げよ武士の上不ど悲しきものハあらトと。たご
女々まももも湯うちかき。彼三閭太夫が澤畔よ吟行まもも
とて。ほどぬく菊池の城下なごまももける。東の郊坵ふる分界
堆子なごまももる例よや。警送の健卒どもハ這里より。阿
蘇松なごおひ放ちてひつ回しぬ。阿蘇松ハ屠所の羊のおもひ
なごし。徐々とたどりけく。やがて岐ふす路の邊の石敢當小
ちうづき。但見まもも妻手ぬる緑叢樹の透間より。一道の茶
の烟たちふびきて。いと冷静たる荒廟ぞあらハまももたる那方
よりむらしとたちいご。阿蘇松なご批とめ。別まもも
惜めるともがらハ日比親しなごまもも。適間より集

合居て起程な見送るよぞわももも骨内ものどもハ
上なごまもも出て来らざるふ。阿蘇松ハ人々小請
もて。茶店小尻うちかけ離盃なごまももかいまももほど小後馳
ふとせつきたる従者がさし出せる花布の袱包なごまもも
裕うち着て。まもも旅装なごまもも。差替の双刀なごまもも佩て。
編笠なごまもも左ももら。こやまももなごまもも告げてうつ起ハ個々涙
の袂なごまももうちける。宮城阿蘇松をまももより。ひたもの東な
ごまもも歩いて歩行ける。阿蘇の御嶽ハ道の便といひ所願も
あももばいご詣でむやと。峻しき羊腸なごまももぼももつ。ねよそ
麓より半腹まもも。百千萬億古木たちこめて。そまもも間
間。山櫻どものさなまもも。花ハまももちる。て。

ふぶりのかきめる嫩のふどその浅翠なるふのどろりたる瞳
影さしていとまむちし。斜風うちそよくとその葉末の
滴は抽ぬ濕す。おの昨の雨の記念ふるべし。蘿はすかき
梯は攀て辛じて宮屋はいたるほきぬ。葦地は
粘印たる花片は残香ふぬあまやふしやえし
まぬ鳥どもむまほきとへづもども。樹かくきて人
ちりよらす。深窓はごうしと岩激泉鳴唳ぐり。石
の華表は幾個うまえ来つ。長命燈もふのありてと
とらふ神くま。聽て岳廟は進香廡下の砂地は
額杖突き祝詞して賽はなふせば。ふりから神樂の
音さへ研していとすべしげぬ。心ゆくやうふま

徘徊けるが例の詩の口裏は衝つづるまふ。腰は佩ひ
たる墨斗とらうで。柄短き毫して瑞籬の瀑たる間に
題つけぬ。這方の大官司は姻族おまむ。やとら尋いたむ。バ
卯の花の垣根は戯遊る。男の童の阿蘇松は熟面たる。お
やぐ一目見るより。そのやく驅入てふまは案内官司忙ハ
まき出むへて正廳は請し。闔門たうりて欵待くる。積る
説話よその夜いといたり更て。やうやく臥房は入ど。
短夜のぬらひ。こやくも山鶴の啼きたる。夢さへ結び
あへて。朝まどたは起出て。粥ふど啜完旅装ひ刷るひ。
いとゆまうしてま出まむ。官司親屬は袖袂は纏りて
挽とむ。阿蘇松いへらく厚意はけけぬ侍もど。御勘

電居の方
 長臣市正
 小たのよし
 秘の御成ご
 しよひそに
 心づつやし
 て見姓阿
 換おが裁
 誹の御内
 意とらか
 いたし



電居の方
 長臣市正

十

當の身の上ぬき一いっ夜といへども御坐近ござぢかたてに長居ながいせ
んんの思おもふきよめらずし。固推辞こつゐしひよもど。大家たいやげは夫つまい
理ことよとちもへびとらふ苗なゆん法とらむふくいと。別わかれぬ惜あはし
けまかくて阿蘇松あそまつの宮司みやうじと宿やどぬたちいづもは夜よハ已とま
明あくふきたもど。木きだち深ふかき山奥やまおくぬき。天色あまぢふは不
のふらし。雲くものたえ間の星輝ほしあかりは透見とほみて。岨路さきみちぬくたんと
ある巖頭いそづつよ立て。老樹らうじゆの隙ひまより見みたろせば。有明月ありあけづきのおち
かたは菊池きくちの御城ごしろとむぼく。粉牆こなづま朦朧もうろう仄見ひらみけるよ。多おほ媽ははの
在所まゐりふま直ただし膝坐ひざまてふ。拜かね。ふとより先まハ山又山やままたやまふ
こけいもば。ふこそとが故郷ふるさとの見終みまはふと。とどろよ腸はら
ぬ断たおしひせ。刺脚さしあし下したより山鶺やまねの二声ふたこゑはう。啼なたつ小こ

も。哀あはれぬそへて。眼めぬ志こころをたき。郭公かくこうハ不な如ごと歸きと
啼なしのと。こもハ罪つとある放逐はうしやくの歸かへる由よしぬき身みの上うへとく
や。歎なげきつ。しむるともよ。血ちのふきたとぞ墜おしける。そま
より宮城みやぎ阿蘇松あそまつハ八重やえよへたつ。山河やまがはぬ跋渉はくせつはくし
ゆきして不などぬ。豊後ぶんごの國くに鶴崎つるさきとゆ。地方ちほうよいたま。り
まの湊みなとよ。便船べんせんぬをて。うちのを。一路いっしよ順風じゆんぷう潮うしほ。日ひあ
らずして周防すおうの國くに降松かふまつの浦うらよ着き小こける。這里こゝより大
内殿うちのみの城下しろした山やまコへハ。早路はやみちゆくと。ころふて。とやその程ほども
遠とほからずとねん。

あはるる日記をき一終



